

第4回の今月号では、インプラント治療（以下「インプラント」）のメリットなどについてお話ししたい。様々な口腔内の症状や、患者さんのご要望などから、インプラントを施す際、私は常に患者さんの長期的な「噛む力の維持」を念頭に手術に当たっている。

年齢、生活習慣（食事、仕事など）、既往症の有無など、できるだけ長くインプラントで噛む力を維持していただけるよう治療に当たる。大半の患者さんは、指示通り定期検診や口腔ケアを頑張っていたが、インプラント寿命を延ばしておられる。

患者さんの中には、上下のアゴ共、一本も歯がない方もおられたし、いわゆるブリッジ治療ができないため、インプラントを選択された方、歯並びを良くしたいと、健康な歯を



抜いてインプラントに、とインプラントを試みる目的は様々。

このように年齢も、口腔の状態も異なるが、インプラント技術は年々進化しており、ほぼどのようなケースにも対応が可能だ。インプラントの最大の治療効果は、やはり「噛む力」の回復・維持だ。

虫歯や、歯周病などで自分の歯を失った方が、インプラントを選択されるケースは少なくない。だが、自分の歯が残っていても、「噛む力」の喪失、劣化に悩んでいる方も相当

**顎関節症**  
**ドライマウス**  
長栄歯科クリニック  
亀井 英志  
Kamei Hideshi

ストレスは  
見える！  
舌痛症

すべては「噛みしめ」が原因だった

気がつくとも歯を食いしばっている、…。心当たりの方は、当コラムの亀井医師の著書『すべては『噛みしめ』が原因だった』をお読みいただきたい。未病、の原因をまとめた良書です。

## 人生の質を変えるインプラント

### インプラントの「メリット」②

数おられ、インプラントを望まれる方も。歯肉の腫れ、噛み合せ不良などで、長いこと柔らかいものしか食べられなかった、あるいは、奥歯を使っ

てしつかりと噛めない、飲食の際、入れ歯が度々外れ、食事を愉しめない、入れ歯が気になって、以前のように外出しなくなったなど、噛む力の喪失・劣化は、ヒトの人生の質、生きる喜びを大きく損ねる、やっかいな一面を持つ。

噛む力を失うことは、モノが噛めなくなることを意味しない。数々の悪影響をヒトのカラダに及ぼすことが、疫学的に知られている。

噛む力が衰えていけば、噛むという動作で得られる脳への刺激が減り、脳の活性が弱まる。噛めなくなること、唾液の分泌が減り、口腔内の自浄作用が低下、さらには乳酸菌など、唾液に含まれる物質で活発に動く善玉菌の活性が鈍くなり、虫歯や歯周病になりやすくなる。赤ん坊が成人に比べ、大量の唾液を流すのは、口腔内を清潔に保ち、免疫力

を高めることを考えれば、噛めなくなることで唾液の分泌が減れば、オトナの口腔内がどのような状態になるか、想像することは容易だろう。

本来あるべきはずの一本の歯を失うだけで、ヒトが失うべきものはあまりにも大きいというのが、歯学医療の「常識」。多くの歯科医は、一本でも歯を残すよう懸命に治療に当たる。

30年以上、インプラント治療に従事してきた筆者だが、健康で長生き、という健康寿命を延ばすためには、インプラントがもたらす効用は、今後さらに価値あるものとして認識されていくと考えている。

噛む力の維持が、病を遠ざける。インプラントを選択し噛む力を取り戻したシニアの皆さんの健康な姿を見る度に、そんな思いを強くする。

亀井英志（かめいひでし）

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

